

# 海を詠う

岩井圭也

## 第二回

余市よいちの夏は、まばたきの間に過ぎていく。

九月には秋の香りが濃くなり、十月には冬が忍び寄ってくる。十一月には白い断片が空を舞い、十二月に入ると銀色の絨毯じゅうたんが敷きつめられる。

ふたりで果樹園に行つてからの半年余り、わたしの頭は東京で占められていた。ぐずぐずしていたら、伊藤いとうさんが手の届かない場所へ行つてしまう。でも、だからといってわたしにはどうしようもなかった。上京を阻止するなんてできないし、したくもない。

六月、修学旅行で内地ほこりへ行つた。東京にも訪れた。初めて吸いこむ東京の空気は、生ぬるくて埃の匂いがした。遊覧自動車に乗つて皇居や明治神宮を見物したけれど、これと違って心には残らなかつた。それよりも、街中で見かけるコンクリート造りの建築物や、道行く洋装の男女に視線を奪われた。

わたしは頭のなかで、日本橋の路傍ろぼうに自分と伊藤さんを置いてみた。涼しげな白いワンピースを着たわたしが、伊藤さんと談笑しながら建物の角を曲がる。空想は、わたしのひ弱な網膜もうまくに焼き付いた。余市に帰ってリンゴの収穫を手伝っているときも、授業を受けているときも、瞼まぶたを閉じれば空想がよみがえった。果樹園ではボルドウ液という防除剤を撒く手伝いをするのだが、伊藤さんのことを考えながら柄杓ひしゃくを動かしていたら、いつの間にか地面がびしゃびしゃになってひどく怒られた。

師走しわすのなかば、わたしは雪に降られながら家路をたどっていた。赤子の拳骨げんこつのような雪を浴び、険しい顔で突き進む。

軒のきの下に入るとようやく人心地ついた。頭からすっぽりかぶっていた海老茶えびちゃの角巻かくまきを脱いで、積もった雪を払う。雪はゴム長靴のなかにまで入りこんでいる。溶けた雪が股引ももひきを濡らして不快だった。全身の雪を入念に落としてから、戸を開ける。たちまち、石炭で温められた空気がこわばったからだを緩めてくれた。石炭ストーブから放たれる熱は、隙間風の吹く小屋にも平穏をもたらしてくれる。

家には母がいて、針仕事をしていた。果樹園を営む母は、春から秋にかけてなにかと忙しくしているが、雪が降りはじめると家にいることが多くなる。妹や叔母は外に出ているらしく、他には誰もいない。

話すなら、いまだ。

わたしは濡れた股引を脱ぎ捨て、セーラー服のまま座卓についた。卓をはさんで向こう側にいる母が、ちらりと顔を上げて、また手元に目を落とした。数えて五十になる母は、懸命に目を細めて針を動かしていた。

「お母さん」

「なに？」

「わたし、東京に行きたいんだけど」

笛のような吹雪の音が、家のなかの静けさを強調した。母は手を止め、これ見よがしにため息をついた。

「いいはずないでしょう」

予想していた通りの答えだった。母は右手で目頭を揉みながらぼやく。

「あなた、なんのために補習科に通っていると思ってるの。学校の先生になるためでしょうが。わたしみたいに苦労しないために、手に職をつけろって……なんべんも同じ話させないでちょうだい」

「わかってるけど、東京に行かないとできないことがあるから」

「東京で、なにするの？」

「文学をやる」

母は、雑木林で遭遇したシマヘビみたいに丸い目を見開いた。

「あなたまで、雑誌をつくるとか、詩集を出すとか言い出すつもり？」  
母の念頭には兄のことがあったのだろう。兄は詩集こそ出していないが、伊藤さんと雑誌をつくっていることは母も知っている。

「そうしたいと思ってる」

小声で言うと、母は「やめときなさい」と言った。

「どうしてもやりたいなら、先生やりながらでいいでしょう。喜代治さんみたいに、立派に仕事をしながら文学を続けている人だって、たくさんいるんだから」

建築技師の喜代治さんは、母方の従兄いとこだった。札幌さつぽろで建築の会社を営みながら、兄たち文学青年の面倒をみている。

「仕事は東京で見つけるから」

「だから、札幌あひかりでも旭川あさかでもいいでしょう。せっかく資格を取るんだから、それを活かさないうでどうするの。あなたは身体も弱いんだし。すっかりよくなったからいいけど、肺炎で顔を真っ赤にして、いまに呼吸が止まるかもしれない気が気じゃなくて……」

「もういい、その話は」

なにか思い出したのか、母の目の縁が赤くなってくる。幼いわたしは虚弱へんじやくで、四歳までまともに歩けなかったらしい。当時の話はさんざん聞かされていた。けど、わたしはもう十六で、砂浜だって雪のなかだってひとりで歩ける。

母は頬に手を当てた。その手の甲は浅黒く、ひび割れている。

「あなたの、文学をやりたいって気持ちはどこまで本当なの？」

なにを問われているのかわからず「えっ？」と訊き返した。

「昇や伊藤さんが賑やかにやっているのを見て、面白そう、と思っているだけかもしれないでしょう。あなたがやりたいのは文学ではなしに、文化的で愉快なことではないの？ それは本当に文学でなければならぬの？」

かつ、と頭に血が上った。

たしかに、伊藤さんのような詩作はできない。でも、わたしの生活には常に詩が、文学があった。兄たちの同人誌を、暗記するくらい繰り返し読みこんだ。学校の先生や、近所に住む年長の知り合いから本を借りた。高女の先生や先輩から短歌のつくりかたを教えてもらった。なにより、物心ついたときから、書くことはわたしのよすがだった。

伊藤さんと一緒にいたい気持ちを否定はしない。けれど、だからといって文学への気持ちを否定するのは卑怯だ。ひきょう

「お母さんに文学がわかるはずない」

「文学はわからないけど、あなたのことはわかるの」

叫び散らしたいのを堪えて、拳を握りしめる。どうすれば母は理解してくれるのだろう。思索しているうちに、戸が開いた。「帰りま

したあ」という妹の間延びした声が家のなかに響く。それを合図に、いったん話し合いは終わった。

母はなに食わぬ顔で針仕事を再開した。布地を繕う針の先が、天井からぶら下がる白熱電球に照らされてきらりと光った。

年が明けて数日経ち、伊藤さんが年賀の挨拶に来た。

家まで足を運んでくれた伊藤さんは、母や叔母に東京行きを打ち明けていた。母はなにかを察したのか、「はあ、はあ」とうなずきながら、こつちをちらちら見ていた。わたしは会話に加わらず、部屋の隅で膝を抱えていた。あと三か月もしたら東京に行ってしまうんだと思うと、寂しくてたまらなかった。

適当なところで会話を切り上げると、着物の伊藤さんが近づいてきた。すねた目で見返すと、顔の前になにかを差し出された。

「よかったら読んで」

それは、〈あほうどり信天翁〉と題された雑誌だった。目だけで問い返すと、伊藤さんが目尻に皺しわをつくった。

「昇たちと一緒につくった雑誌だよ」

衝動にあらがうのは無理だった。おずおずと手を伸ばして雑誌を受け取り、畳の上に広げた。次の用事があるのか、伊藤さんはすぐに黒いマントを羽織って「それじゃあね」と足早に去っていった。

残されたわたしは自室に引っこみ、二時間ほど文字の海に沈んだ。  
〈信天翁〉に掲載されているのは、伊藤さんや兄、その文学仲間が書  
いた作品だった。彼らの新作を読むのは久しぶりだった。わたしは  
心の奥底に刻みつけるように、一語一句をじっくりと味わった。

とりわけ惹かれたのは、伊藤さんの〈海の捨児〉すてこという詩だった。

私は浪なみの音を守唄うたにして眠る。

騒さわがしく 絶間ぜつかんなく

繰り返して語る灰色の年老いた浪

私は涙も涸かれた凄愴せいそうなその物語りを

つぎつぎに聞かされてみて眠つてしまふ。

7

冒頭から、懐郷の切なさが満ちている。

海鳴りが耳によみがえる。時化しげの夜、荒れた海に投げ出されたか  
のように、この家は騒々しい波音に包まれる。もしかしたら伊藤さ  
んも同じように、波に吞まれ、海に揺られるように眠ったことがあ  
るのだろうか。

わたしには、あの寒々しい風景を情感たつぷりに表現することな  
どできなかった。わたしが帳面に走り書きする詩は、どれもこれも  
無機質でよそよそしい。伊藤さんの詩のように、温かく、湿った気配

をまとわせることができない。抒情にあふれ、人を感動させる詩を書くことができない。

「どうして」

幾度目かに〈海の捨児すてこ〉を読んだとき、下瞼したまぶたから涙がこぼれた。濡れた誌面をあわてて袖そでで拭う。

どうして、わたしには詩の才がないのだろう。詩の才があれば、文学をやる、と胸を張って言えるのに。伊藤さんや兄と一緒に、堂々と雑誌をつくることができるのに。教員の免許なんていらぬ。英語も和裁も、できなくなつていい。詩人になりたい。詩を愛好する人々に、伊藤さんに、認められたい。

力まかせに〈信天翁〉を閉じ、雑記帳を座卓の上に広げた。ペン先をどぼりとインクにつけて、手あたり次第、詩らしき言葉を書き散らしていく。十行書き、二十行書き。わたしの思いとは裏腹に、言葉はどれだけ連ねても詩にならない。よその家から寄せ集めた端切れはぎをつないだように、ちぐはぐなままだった。

ペンを走らせていると、視界が滲んだ。手の甲で拭ってさらに書く。何十行書いても、言葉は詩にならない。だんだん字が崩れていく。

「どうして」と再び、つぶやいていた。

どうして、詩が書けないんだろう。どうして、わたしは選ばれなか

ったんだろう。

いつしか筆圧が強くなりすぎていたのか、ペン先がつぶれた。あつ、と思う間もなくインクが漏れ出し、黒い染みが帳面の上に広がっていく。ぬらぬらと黒く光る紙を見ると、ついに我慢できなくなり、ペンを放り捨てた。うつ伏せになり、半纏はんてんの袖に顔を埋めて嗚咽おえつを殺す。

口笛のようなシギの鳴き声が聞こえた。それさえも腹立たしくて、床板を拳でやたらめったら叩いた。

補習科の卒業が間近に迫った、三月なかば。学校帰りに律ちゃんを連れて、小樽の「越治こしじ」という喫茶店に入った。

静かな店内には、一人でコーヒを飲む男の人や、ひそやかに話しこむ妙齡みょうれいの男女がいた。一瞬たじろいだけど、思い切って店主に「二人です」と声をかけると、窓際の席に案内してくれた。テーブルをはさんで座る律ちゃんは、頬を赤らめていた。

「ちかちゃん、ここよく来るの？」

「まあね」

本当は一度しか来たことがなかった。以前、兄が帰省したときに伊藤さんと三人で入ったのだ。その日のわたしは、コーヒを前に石像と化していた。砂糖もミルクも入っていないコーヒは、ただ

苦かった。律ちゃんが「注文まかせるよ」というので、店主には紅茶をふたつ頼んだ。

「一度、制服で喫茶店に来たかったんだ」

律ちゃんの声は弾んでいる。わたしは制服でも私服でも、卒業前に律ちゃんとおしゃべりできればなんでもよかった。

「律ちゃんはセーラー、好きなの？」

「前よりはかわいらしいでしょう？」

高女の式服は、昨春まで袴はかまだった。補習科に進まなかった友達は、「わたしたちもセーラー来たかったなあ」と悔しがっていたけど、わたしはそもそも制服をなくしてほしかった。着る服くらいは自分で選びたい。

わたしたちは紅茶を啜すすりながら、思い残しがないよう、さんざん噂話に花を咲かせた。高女の新入生に一学期で退学した子がいて、どうやら宝塚音楽学校への入学を目指しているらしい、という話だった。

「わたし、その子見たことあるんだけどね。すっごく手足が長いのですらっとしてて、一年生なのに大人みたいでびっくりした」

なぜか、律ちゃんは声を落としていた。

「へえ。綺麗な子だったんだ」

「でも東京にはそういう人、たくさんいたよね。遊覧バスに乗って

るとき、銀座や日本橋で見かけたもの。ちかちゃんのお兄さんは、毎日のように美人を見てるんじゃない？」

「……どうだろう」

たしかに兄は東京に住んでいるけど、美人を美人と認識できるかも怪しいものだった。伊藤さんと違って、北海道にいたころの兄には浮いた話ひとつなかった。きっと男か女か見分けるのが関の山で、美しさを論じるなんてとうてい無理だ。

「ちかちゃんは、東京行けそう？」

律ちゃんが上目遣いでわたしを見た。上京のために母を説得していることは、この親友にだけは打ち明けていた。

「駄目。聞く耳も持っていない」

「本当にこっちで就職しないの？ まだ滑りこめるかもよ」

「いやだ。わたしは東京で仕事を見つかる」

腕を組み、鼻から息を吐く。ここまで来たら、母とわたし、どちらが先に痺れを切らすか我慢比べだ。

「強情だね、ちかちゃんも」

律ちゃんが肩をすくめた。彼女は旭川の小学校で教員をやることが決まっていた。

「こっちは来月にはもう、旭川だよ」

「がんばってね」

「……わたしも行きたいなあ、東京」

「なに、そうなの？」

律ちゃんが上京したがっているなんて初耳だ。急に照れくさくなつたのか、律ちゃんは口元をゆがめ、からだをくねらせた。

「絵の勉強をしたいんだけど」

たしかに、律ちゃんは絵がうまい。授業の合間に描いた教師の似顔絵で、何度笑わせられたことか。でも、そこまで本気で絵描きを目指していたなんて知らなかった。

「言ってくればよかったのに」

「うーん、まあ、あくまで希望ね。夢は夢のままのほうが美しいから」

「なに言ってるの。わたしは絶対、東京に行く」

押し黙った律ちゃんの顔には、ほんのりと不機嫌が表れていた。強く言いすぎたかもしれない。律ちゃんだって本当は仕事を辞めて上京したいに違いないけど、そうはいかない事情があるのだろう。わたしが就職せずにいることも、内心、よく思っていないのかもしれない。

「ごめん」と告げると、律ちゃんは首を横に振った。

「いいの。でもね……これは、言おうかどうか迷ってたんだけど」

律ちゃんはカップを手にしたが、すでに空になっていて、口をつ

けることなくソーサーに戻した。店内は他のお客さんの話し声でさざめいていた。

「伊藤さんは、ちかちゃんが考えるほどいい人じゃないと思う」

からだだから、すうつ、と体温が奪われていく。律ちゃんは、わたしの伊藤さんに対する思いを前から知っている。はつきりと口にしたことはないけど、友達のあいだでは公然の秘密みたいなものだった。だから、それを指摘されたことは別にいい。でも、伊藤さんがいい人じゃない、というのは聞き捨てならなかった。

「いまの、どういう意味？」

「姉さんから聞いたの、いろいろ」

「いろいろって？」

律ちゃんはうつむいて、口をつぐんだ。話が前に進まない。

「ずるいよ、思わせぶりなことばかり。言うならちゃんと行って」

「ごめん。そうだよね」

深呼吸した律ちゃんは、「誰にも言わないでね」と繰り返し念を押したうえで、律ちゃんの姉——シゲルさんと、伊藤さんの恋の顛末<sup>てんまつ</sup>を語りはじめた。

ふたりが交際をはじめたのは、伊藤さんが高商を卒業する前の年だった。

「姉さんは列車のなかで伊藤さんと知り合って、手紙をやりとりす

るうちにそういう仲になったんですって。蘭島らんしまの海水浴場に行った  
り、学校を休んで港の公園で落ち合ったりしたんだって言うってた」

シゲルさんとは何度か顔を合わせたことがあった。背が高く、顔  
色のいい女性だった。ただ、会話した記憶はほとんどない。この人が  
伊藤さんとふたりきりの時間を過ごしていたのだと思うと、どうし  
ても顔を見て話すことができなかった。

ふたりきりで、伊藤さんはなにを話したのだろう。彼の指はシゲ  
ルさんの肉体の、どこに触れたのだろう。からだが芯から熱くなる。  
律ちゃんの声が聞こえにくくなり、消え入る寸前まで小さくなる。

「ここだけの話なんだけれど。あのね、姉さん……前の学校にいた  
とき、結婚している人と恋愛していたの。それがばれて学校を替わ  
ったんだけど」

ごくり、と唾を呑む音が耳の内側から聞こえる。結婚している男  
の人との恋愛なんて、想像すらできなかった。律ちゃんは緊張のせ  
いか、セーラー服の袖を強く握っていた。

「でね、その噂が伊藤さんの耳にも入っちゃったの。伊藤さんはえ  
らく落ちこんだみたいで、その後すぐに別れたんだけど。別れてか  
らしばらくして、姉さんは余市で伊藤さんとはったり会ったんだっ  
つ」

もはや、律ちゃんの言葉以外わたしには聞こえなかった。耐えき

れず、「それで？」と先を促す。うなが

「伊藤さんから、きみを忘れたことはない、って言われたら嬉しいの」

「もう別れたのに？」

「そう。姉さんが立ち去ろうとしたら、強引に引き寄せてきて。姉さんは断ったんだけど、二度と離れたくない、一緒にいてくれなければ……この場で殺す、って」

「嘘？」

がたん、と椅子が鳴った。

「伊藤さんが、殺す、って？」

「姉さんが言うには、絶対に冗談ではなかった、って。そのときの伊藤さんの顔、すごく怖くて、このままだと本当に殺されると思ったらしいの。黒目がいやに小さくて、鬼の面みたいで。無理やり突き飛ばして、どうにか逃げてきたんだけど。その日の姉さん、家に帰ってからわんわん泣いたの。死ぬかと思った、あんなに怖い目に遭ったのは初めてだ、って」

言葉が出なかった。律ちゃんが語ったのは、わたしが知っている、穏やかで理知的な伊藤さんではなかった。勘違いじゃないの、とは訊けなかった。号泣しながらこぼしたシゲルさんの言葉に、誤りがあるとは思えない。

「伊藤さんは頭がいいし、詩の才能だってある。先輩として、文学仲

間としてはいい人だと思う。でも、恋人としていい人かはわからない。それとこれとは別の話だよ。ちかちゃんには、姉さんみたいになつてほしくない」

律ちゃんは寂しげに空のカップを眺めた。その唇は細かく震えている。彼女だつて、緊張しているのだ。これを話すため、どんなに勇気を振り絞つただろう。それを考えると、鼻であしらうような返事はできなかつた。

店の隅では、店主が冷ややかな目でわたしたちを見ている。気がつけば、紅茶一杯で二時間も話しこんでいた。

「そろそろ出よう」

回答を保留したまま、わたしたちは「越治」を出た。踏みしめられた残雪のあいだを、並んで駅まで歩く。夕刻の風がお下げを揺らした。

「次、いつ会えるかな」

つぶやきは、三月の空気に溶けて消えた。

再び、緑の炎が地上を覆う季節になった。

教員の仕事をするでもなく、かといって同人活動に参加するでもなく、果樹園の手伝いをしながら日を過ごした。母との話し合いは一向に進展しなかつた。上京を懇願するわたしに、母は決して首を

縦に振らなかった。

伊藤さんは宣言した通り、教員を辞めて四月に上京した。東京でどんな暮らしをしているのかは知らない。手紙を送ったけれど、返信は来ていなかった。

五月の終わりの昼下がり、朝からひとりでポルドウ液を撒いた。ぼろぼろになった袴はかまを穿き、手ぬぐいで頭を覆い、大きな木桶きおけと柄杓しやくを使って、一本ずつリンゴの木に防除剤を撒く。短い小指を引っかけないようにするのが、わたしなりの柄杓の持ち方だった。

雲のない晴天の下、重い木桶を持って歩くのはきつかった。作業をはじめて十分もしないうちに、額や腕が汗でびっしょりと濡れた。いったい、なにをやっているのだろう。

自慢ではないが、高女の成績は良かった。数学は苦手だったけど、それ以外の科目はおおむね優秀だった。先生の覚えもめでたかった。そんなわたしは、いま、汗みどろになって農薬を撒いている。これだって大事な仕事には違いない。それはわかる。でも、この頭とからだは本来、教員の仕事に使うべきではなかったのか。補習科をふくめて高女に五年も通ったのは、母の小さな果樹園を守るためだったのだろうか？

文学がやりたい。文学さえやれば、すべて解決する。

昼下がり、旬のイチゴを採って木陰で食べた。みずみずしい果実

を口にふくむと、甘酸っぱい汁があふれた。健啖家けんたんかとは言えないけれど、イチゴだけはいくらでも食べられる。まとめて十五、六粒も食べて、もう少し採ろうと腰を上げたときだった。

「ちかちゃん」

丸みを帯びた男性の声が、リンゴの樹列のあいだから聞こえた。まさか。呆然と立ち尽くすわたしの前に現れたのは、白いシャツを着た伊藤さんだった。

きゃっ、と悲鳴が出た。突然人が現れたことへの驚き。東京にいるはずの人が、目の前にいるという事実。自分がまどっている野良着のみつともなさ。そういう諸々が、ひとつの悲鳴となって喉から転がり出た。

伊藤さんは「ごめん、ごめん」と言いながら近づいてくる。

「おどかすつもりはなかったんだ。久々にちかちゃんを見て、うれしくなって」

わたしはつい、伊藤さんの足をまじまじと見ていた。ちゃんと足があるから、幽霊ではないらしい。もつとも伊藤整せいの幽霊なら、真昼の果樹園に出てくるような野暮やぼな登場の仕方は選ばないだろうけれど。

伊藤さんは、赤い汁で濡れたわたしの手ぬぐいを見て「イチゴ？」と問うた。

「えっ？　そうですけど」

「ぼくも食べていいかな」

許可を出すより早く、伊藤さんはイチゴの畝うねにしゃがみこんだ。シャツの袖をまくりあげた伊藤さんは、熟した果実をつまんで、軽く袖で拭いてから口に放りこんだ。大げさに顎あごを動かして咀嚼し、わたしに微笑ほほえみかける。

「おいしいね」

なんだろう、これは。疲れが見せている白昼夢だろうか。

伊藤さんは、わたしと同じ木陰に入ってきた。目で促うながされ、同時に腰を下ろす。両手をはたいた伊藤さんは、急に難しい顔をした。

「父が急病でね。先日、こっちに戻ってきた」

どうやら白昼夢ではないらしい。動悸を押し殺し、「そうなんですか」と言うことしかできなかった。伊藤さんはだんまりを決めこんだ。雑草の上に膝を伸ばし、まぶしそうに目を細めて、緑色に燃える果樹園を眺めている。

「あの、兄はどうですか」

話のいとぐちがほしくて、思いついた兄のことを口にした。伊藤さんの口の端が少しだけゆるんだ。

「昇のぼは元気にやってるよ。いま、一緒に住んでいるんだ」

「おふたりで？」

「他にも何人かとね。北海道から来た連中がまだいるんだ」

伊藤さんいわく、兄は小樽や余市から来た文学仲間、あるいはその身内の世話役になっているようだった。いかにも、人の面倒を見るのが好きな兄らしい。兄のことを話していると、次第に伊藤さんの舌がなめらかになってきた。

「近いうちに、昇たちと新しい雑誌をつくらうと思っている」

「〈信天翁〉ではなく？」

「あれは中止だ。次はもっと本格的な文芸雑誌を立ち上げる。ぼくらの代名詞になるような同人をつくるんだ」

十分、〈信天翁〉だって素敵な雑誌だと思えます。その言葉を呑みこんだのは、伊藤さんの意志に水を差したくなかったからだ。きくと伊藤さんは、北海道でやってきたことを捨て去ろうとしている。東京へ行った意味を、みずから証明したがっている。

伊藤さんの頬はかさつき、唇は乾いて一部がめくれていた。いくから見つめても本心が透けて見えることはないのに、その横顔から目を離すことができなかった。

「あの」

伊藤さんは「なに？」と振り返った。

律ちゃんのお姉さんを、殺そうとしたんですか。

そう訊いたら、この人はどう答えるだろう。なに言ってるの、と笑

い飛ばすだろうか。それとも、そうだよ、と微笑む？ 伊藤さんがシゲルさんを殺そうとしたのは、愛していたから？ だったら、わたしのことは殺してくれない？

「ちかちゃん」

振り返ると、伊藤さんが蓬フキを食べたみたいな顔をしていた。

「なにを考えているの？」

とっさに「いいえ」と口走った。考えていることを絶対に知られなくて、逆の方角に顔を向けた。ブヨの群れが草木の合間でたまたまっていた。

「東京のことかな」

伊藤さんの問いに「えっ？」と問い返す。どうやら、わたしの沈黙を別の意味に取ったらしい。伊藤さんは転がっていた小石を手に取り、野放図のほうずに生えている雑草に向かって放り投げた。

「昇ノボに聞いた。上京したいんだらう。ご家族は反対しているみたいだけど」

「……知ってたんですね」

おそらくは母から、手紙かなにかで聞いたのだろう。上京について兄に直接相談したことはない。高女の学費を兄に出してもらった手前、教員にならない、という選択を打ち明けるのは心苦しかった。

「ちかちゃんが東京に来ること、昇は賛成しているよ」

「本当ですか？」

声が裏返った。伊藤さんはまぶしそうに目をすがめて、果樹園を見ていた。

「たしかだ。ちかちゃんが来たらにぎやかになる、とうれしそうに言っていた。たぶん、昇の家で面倒を見るつもりなんだろう。仕事だってなんとかなるんじゃないかな。昇は貯金局では顔が利くらしいから、世話してもらえるかもしれない」

「でも、せっかく高女を出たのに」

「ちかちゃんが思うように生きること。それが、昇のいちばんの願いだよ」

じわっ、と涙腺るいせんが緩んだ。手ぬぐいで顔を覆ったが、間に合わなかった。水滴が睫毛まつげを濡らし、玉になって草の上に着いた。

「遠慮しているのなら、その必要はない。昇もぼくも、いつでも歓迎する」

伊藤さんは立ち上がり、尻をはたいた。シャツの袖には乾いた泥がついていた。

「当面は家の用事で忙しいけど、落ち着いたらまた遊びに来る」

軽やかな足取りで、伊藤さんは木陰から離れていく。左右の足を規則正しく動かし、リングの木々の隙間をまっすぐに進む。一度も振り返ることなく、陽炎かげろうの立つ茂みの向こう側へと消えていった。

わたしにはどうしても、伊藤さんが本気で人を殺そうとしたとは思えなかった。

砂浜の一角に、鮮やかな桃色の花が咲いていた。

百を超えるハマナスの花が、七月の浜辺で群れている。砂上の花々は、肌はに散った血を連想させた。

空は白く曇り、藍色の海は波立っている。浜辺は無人だった。椅子代わりに岩に座るわたしの手元には、年始に伊藤さんからもらった〈信天翁〉の一号があった。もう何度読んだかわからない〈海の捨児〉すてこに、再び目を通す。

何時いつ私は故郷の村を棄てたのだらう。

あの斜面の草むらに残る宵宮よみやの思ひ出にさよならをしたのだらう。

ああ 私は泣いてゐるな。

ではまたあの村へ帰りたいといふのか。

莫迦ぼかな。

もうどうしたつて帰りやうのない

遠いとほい海の上へ来てゐるのに。

この詩を読んでいると、書き手の姿を重ねずにはいられない。故

郷の村を棄て、東京という帰りよのない遠い海へ行ってしまった伊藤さん。自分自身を捨児すてこだと称する伊藤さん。ずるい、とわたしは思う。みずからの意志で上京したのに、故郷に捨てられたかのように書くのは正直じゃない。あるいは。伊藤さんは心から、捨てられたと思っっているのだろうか。ここには自分の居場所はないと悟り、東京へ赴おもむいたのだろうか。そう考えると、不思議とすっきりした。

伊藤さんも、兄も、わたしも、捨て子なのだ。

高女にいた大半の同級生は、なんの疑問もなく故郷や赴任地でがんばっている。なのに、わたしは同じようにできなかった。お前はここにいてはいけない、教員になつてはならない。そう言い含められ、海に捨てられた。捨てたのは誰か？ 答えはあきらかだった。

わたしを捨てたのは、文学だ。

文学は、故郷で平穩に生きることを許さなかった。血を沸騰ふつとつさせ、悔し涙を流すことを求めた。高女に通った過去を破棄はきするよう求めた。伊藤さんや兄は文学に捨てられ、東京に流れ着いた。そして、わたしも――。

背後で物音がした。振り返ると、一羽のシギがとぼとぼと歩いてきた。灰色の羽のせいか、腹の白さが際立っている。

その向こうでは、カラマツの防風林が緑色の火花を散らしていた。鮮やかすぎる青々しさに目を細める。先日、眼科で眼鏡を勧められ

た。緑の炎のせいではないだろうが、人よりも目が弱いのは間違いないらしい。伊藤さんが使っているのと似た、丸いレンズの眼鏡を作ろうと思っている。

雑誌を手にしたまま岩から立ち上がった。もう片方の手で銘仙の裾をめくって、波の際に歩み寄る。ゴム製の千日履きがべたべたと音を立てる。歩調をゆるめることなく、水のなかに踏みこんで足を浸す。波が寄せて、ぬるい海水がくるぶしを包んだ。潮の香りがむっと濃くなる。

わたしは水平線に向かって雑誌を放り投げた。読みこんで皺がっていた雑誌は、しばらく海面に揺らいでいた。だが少し高い波をかぶり、全体がぐっしりと濡れると、ゆっくり水のなかへ沈んでいった。

踵きびすを返して、濡れた足のまま砂浜を横切った。足に砂がくっついて不快だったけれど、歩いているうちに大粒の砂は落ちていった。

カラマツに手をつけて砂を払い落とし、会津長屋あいづながやへと向かう。

〈海の捨見〉は海に消えた。

数日後、伊藤さんが家に来た。

そのときわたしは、手慰みに草鞋わらじを編んでいた。家には他に誰もいなかった。紺の緋かすりを着た伊藤さんの顔は青白かったけれど、表情

はしっかりしていた。

「父の葬儀が終わったよ」

土間に立ったまま、挨拶もせずに伊藤さんは言い放った。お父さんが亡くなったことは知らず、わたしはどきまぎしながら「ご愁傷しゅうしょう様です」と頭を下げた。

「あの、いいんですか。おうちのことは……」

「大方、片付いた。しばらくはこっちに残るつもりだけど」

伊藤さんは下駄を履いたまま、板敷に座りこんだ。どこにいればいいのか迷った拳句、斜め後ろに正座した。伊藤さんの目は木の洞うらのようだった。

「父は教員だったんだ」

注意しなければ聞き落としてしまいそうなほど、小さく、かすれた声だった。

「ぼくが育ったのは、塩谷しおやのなかでも静かな場所だね。父はこの分教場で教えていた。地元の子どもらは教員の父しか知らないけれど、塩谷に来る前には二〇三高地で戦っていたらしい。そこで生きるか死ぬかの重傷を負ったと言って、からだに残った傷跡をぼくや弟妹によく見せていた。ぼくは傷跡が怖くて、いつも目をそらしていた。裂けたアケビの皮みたいにいびつで、中身が飛び出してきたうだった」

話を聞きながら悟った。わたしはきつと、兄の代わりなのだ。本当なら、こうして伊藤さんの横で思いを受け止めるのは兄の役目なのだろう。しかし兄は東京にいる。だから妹であるわたしを代理に選んだ。それでもわたしはうれしかった。身代わりだろうがなんだろうが、伊藤さんの横にいられるのだから。

「文学のことは応援してくれていた。手前の稼いだ金でやるなら親でも口は出せない、という理屈の人だったからね。ぼくは教員をやっていたし、口だけではなく詩集も出した。だから父も認めてくれた」

「お父さんも、あの詩集を読まれたんですか？」

「読んだはずだ。おれにはわからない、と言っていたけど」

伊藤さんは苦い笑いを浮かべた。

「父はこの先もずっと、生き続けると思っていた。十年経っても、二十年経っても。なんでだろうね。ぼくより早く死ぬのは当たり前なのに」

伊藤さんは右手で頭を掻きむしった。爪のあいだに、白い皮脂が挟まっていた。

「ぼくはまだ、死にたくない」

「大丈夫。伊藤さんはまだ死にませんから」

とにかく励ましたい。それだけだった。常識に照らせば、二十三歳

の伊藤さんがすぐに死ぬとも思えない。けれど、安易な言葉は期待した効果を生まなかった。伊藤さんの首が、ろくろに乗った壺みたいにぐるりと回ってわたしを見た。白目には、葉脈に似た赤い血管が走っていた。

「どうしてそんなことが言える？」

えっ、と言ったきり、なにも言えなくなった。伊藤さんは目を剥き、からだをひねった。

「ぼくが死なない保証なんて、どこにもないだろう」

「でも……まだ死ぬには早すぎるから」

「死ぬのに早すぎる年齢なんてないんだよ。父だってもっと長く生きるつもりだったんだ。死ぬときは、いくつだって死ぬ。その日は来年かもしれないし、明日かもしれない。死神でもないのに、まだ早い、なんてことは言えない」

伊藤さんの唾が板敷いたじきに飛んだ。わたしには、声にならない声で「すみません」と言うほかできることはなかった。小さなムカデが土間を這っていたが、つまみ出すものはばかれて、じっとその歩みを見ていた。

「死ぬんだよ、人は」

虚空こくうを見つめる伊藤さんの眼鏡は、脂で曇っていた。

「ぼくもちかちゃんも、死ぬんだ。生きていたのが嘘みたいに。灰に

なって、跡形もなく消え去るんだ」

「……それでも、いまは生きています」

喉から絞り出された言葉は、自分でも思いもよらないものだった。「生きていますよ、わたしたち。眠って、歩いて、ご飯を食べる。灰になった後のことを考える暇があったら、詩の一篇でも書いたほうがずっとましです」

伊藤さんが振り返った。

その目を見て、以前、余市の港で見たニシンを思い出した。網に捕らわれた大量のニシンは、一匹残らず息絶えていた。死んだ魚の目はうつすらと白濁はくたくしていた。無数の、墨を落としたような黒目がわたしを見ていた。

「お前になにがわかる」

次の瞬間、伊藤さんの右手がわたしの左手首をつかんだ。細く長い指は、痕あとが残りそうなほど強く手首を握っていた。

殺されるかもしれない。そう思うと同時に、歓よろこびが胸を貫いた。彼の手で死ぬことができれば、わたしはきつと伊藤さんの永遠になる。他の誰も追いつけない、絶対的な存在になれる。

けれど、伊藤さんは手首をつかんだまま動こうとしない。

冷たい指先は、雄弁ゆうべんに内心を物語っていた。求められているのは、わたしではなかった。白濁した視線の先にいるのは東京の川崎昇で

あり、わたしはただ、代替物としてこの場にあるだけだった。

伊藤さんは前触れなく手を離れた。それからしばらく、黙ってうなだれていた。わたしはただ、家族が帰ってこないことを願った。少しでもいいから、そっとしておいてあげたかった。

三十分ほどもうずくまっていただろうか。おもむろに、伊藤さんは「帰るよ」と言った。

「悪かったね。突然訪ねて、一方的に」

「とんでもないです」

はかない笑みが、伊藤さんの顔の上をよぎった。

「ちかちゃんは、まるで妹みたいだ」

心臓がぎゅう、と縛られた。ちっとも喜ばしくない台詞だった。わたしは、伊藤さんの妹になりたいのではない。血筋なんかより、もっと深いところで結ばれた関係になりたい。一緒にいてくれなければこの場で殺す、と言ってほしい。今すぐにその長い指で、わたしの首を締めてほしい。

「東京で会えるのを楽しみにしているよ」

伊藤さんはふらつく足取りで家を出て行った。目の前で戸が閉められる。

とても、草鞋を編む気にはなれなかった。畳の上に仰向けに寝転がり、腕を伸ばして、両手を広げた。やっぱり、小指だけが短かつ

た。

わたしの運命は短い。悲しいけれど、それは確信に近かった。

——死ぬんだよ、人は。

そんなことわかってる。伊藤さんも、兄も、母も、妹も、律ちゃんも、みんないつかは死ぬ。例外はない。当然、わたしだって。

心のなかで、〈海の捨児〉の一節を暗唱する。

でも今に私は忘れるだらう。

どんな優しい人々が村に居たかも。

昔のこひびとは見知らぬ誰かの妻になり

祭の宵には 私の思ひ出を

微笑に光る涙にまぎらせても

私は浪の上を漂つてゐるうちに

その村が本当にあつたか どうかさへ不確かになり

何一つ思い出せなくなるだらう。

東京に行こう、と決めた。親族の意見はどうでもいい。すでに決まったことなのだ。わたしには、余市に残ったまま文学をやることはできない。東京に行かなければ。海に捨てられなければ。

いてもたってもいられなくなり、千日履きをつつかけて家を出た。

頭上は雲ひとつない晴天だった。

粗末な家が建てこんだあたりを抜けて、やみくもに歩くうち、大通りに出た。針葉樹しんようじゆの林の向こう側に、平らな山容が見えた。湯内岳ゆないだけだ。夏の湯内岳は、旺盛おうせいに伸びる青葉に覆われていた。そのまばゆさに足が止まる。

思いきり、空気を吸いこんだ。潮騒しおさゐや海風、草の匂いや輝く緑が、いっぺんにわたしの体内を満たした。

いずれわたしは、何ひとつ思い出せなくなるかもしれない。海に捨てられ、流れ着いた先で、故郷を完璧に忘れ去るかもしれない。それでも、いまだけは、余市の夏ひたに浸りたかった。でたらめな草木の生命力に焦がされたかった。

民家の木塀の内側に、一本だけリンゴの木が植えられていた。鋭い日の光が葉の紋様を透かしている。木はまるで燃えているかのようになり、みずから光を放っていた。目が痛むのも構わず、わたしはじつと、燃え盛る緑を見つめていた。

〈つづく〉